

「母と娘の物語」

◆登場人物

娘 母

石黒 秀和

0

○プロローグ

役者、入ってくる。
席に着く。
役者、顔を見合わせる。
本を開く。
客を見る。
語りかけるように、

娘「こんにちは」
母「こんにちは」
娘「調子は、どうですか？」
母「ありがとね」
娘「私、判る？」
母「・・・ごはん」
娘「（微苦笑し）ごはんは、まだかな」
母「お風呂」
娘「お風呂も、まだかな」
母「こんにちは」
娘「こんにちは」
母「ご用は、なんですか」
娘「お顔を見に来ました」
母「――」
娘「お母さん、元気かなって」
母「ありがとね」
娘「元気そうで、良かったです」
母「（微笑み）はい」
娘「あのお、お名前、教えてもらってもいいですか？」
母「――」
娘「お母さんの、お名前」
母「――良江」
娘「良江・・・お母さんの、お名前？」
母「（頷く）」
娘「・・・そうかあ・・・（微笑み）いい、お名前ですね」
母「（微笑む）」
娘「――じゃ・・・娘さんの、お名前は？」
母「・・・正美」

娘「正美さん？」

母「(頷き)はい」

娘「お母さんの名前が良江さんで、娘さんの名前が正美さん？」

母「はい」

娘「・・・そうか・・・そうだね、それも、いいかもね。うん、次は、それでいこうね」

母「(微笑み、頷き)はい」

と、突然、母がいきみだす。

娘(N)「一九六九年、横浜、助産院」※Nは映像で表現してもいい。

娘「あー寒い、それが私の、生まれた瞬間の感想。一九六九年十二月二十九日、午前八時三十九分。私は、この世に誕生した」

産まれる。

娘「あー、寒い。寒いし、怖い。なんだか、とつても怖い。戻りたいよ、さつきまでのところに、戻りたい。やだよ、ここは、なんだか、とつても、やだよお」

母「良江」

娘「え？ 誰？」

母「良江」

娘「知ってる、この声。聞いたことある」

母「良江」

娘「どこ、どこにいるの？」

母「ようやく会えたね。ありがとね、生まれて来てくれて、ホントにありがとう。私は、松永正美です。よろしくね。これから、よろしくお願いします(と良江を胸に抱き、撫でる)」

娘「その手のぬくもり、胸のぬくもりにあったかい。とつても、あったかいよ。正美さん。お母さん。こちらこそ、よろしくお願います」

母(N)「一九七三年、初登園」

娘「やだよ。絶対、やだ！」

母「どうして」

娘「どうしても！」
母「楽しみにしてたでしょ」
娘「楽しみになんかしてない！」
母「大丈夫、お母さんも一緒だから」
娘「やなの、絶対やだ！」
母「お友達、いっぱいいるのよ」
娘「いっぱいいらない！」
母「すぐ迎えに行くから」
娘「うそ、絶対来ない！」
母「来るわよ。お母さん、良江ちゃんのこと大好きなんだから。だから、すぐ迎えに行く」
娘「・・・すぐ迎えに来る？」
母「すぐ行く」
娘「ほんと？」
母「ほんと」
娘「・・・(しぶしぶ頷く)」

二人、手をつなぐ。
門をくぐる。
手が離れる。

間。

娘「来ない、お母さんの、うそつき！！！」

母(N)「一九七七年、台所で」

夕飯を作っている母。
やってくる娘。

娘「もう、絶対許さない！」
母「あら、どうしたの」
娘「健太君、私のことブスだって」
母「あらあら」
娘「私のランドセル、ひっぱったりもするんだよ」
母「どんなふうによ？」
娘「こんなふうによ」

母「やめてって言った？」

娘「ううん、やりかえした」

母「(手を止め)え？」

娘「良江も、健太君のランドセルひっぱってやった」

母「そうなの・・・」

娘「そうしたら、ブスだって」

母「・・・」

娘「あいつ、もう絶対許さない！」

母「・・・(微笑み)そうかあ、でも、健太君、良江ちゃんのことを

好きなのかもね」

娘「え〜」

母「(微笑み、娘の目線になると)でもね、良江ちゃん。今度、いやなことされたら、その時はやりかえすんじゃなく、やめてって、言葉にして、言いなさい。言葉は、そのためにあるの。あなたの気持ちを、伝えるために、あるの。お母さんだって、いつつも言ってるでしょ。良江ちゃんのこと、大好きだって、言葉にしてるでしょ」

娘「(頷き)うん」

母「(微笑み)大好きだよ、良江ちゃん」

娘「私もだよ、お母さん」

娘を抱きしめる母。

母(N)「一九八〇年、居間」

洗濯物を畳んでいる母。

ちゃぶ台で宿題していた娘、あまり身が入らず、やがて鼻歌を唄い出す。

母、その鼻歌に、合わせ唄い出す。

鼻歌はやがて二人の大合唱に。

笑い合う二人。

これが二人の日常。

娘「(再び宿題に戻り)ねえ、お母さん」

母「(作業しつつ)なあに」

娘「お父さんって、どんな人だった。いい人だった？」

母「(手を止めしばし考え)いい人だったわよ、とってても」

娘「かっこよかった？」
母「写真見たことあるでしょ？」
娘「よくわかんないもん」
母「うーん、顔は、まあまあかな、でも、背が高かった」
娘「病気で死んじゃったんでしょ？ なんの病気だったの」
母「心臓の、病気で言うのかな、お風呂場で急に倒れて、そのまま・・・」
娘「ふーん」
母「お父さんね、良江に会えるのとっても楽しみにしてたのよ。お腹にね、いっつも手あてたりして」
娘「触ってたの？」
母「(頷き)毎日」
娘「ふーん」
母「(再び作業に戻りさりげなく)良江、寂しかった？ お父さんいなくて」
娘「(小さい間があり、首振り)お母さんいたから」
母「良江の良の字はね、お父さんの名前から一字もらったのよ。良史の良。良江は、どんどんお父さんに似てきた」
娘「(むくれる)」
母「どうしたの？ そんな顔して」
娘「だって、まあまあだったんでしょ？ お父さんの顔」
母「(笑って)良江はかわいいわよ」
娘「わかってる、私も、まあまあ」
母「そんなことないよ」
娘「そんなことあるの、五年生にもなったたら、そのくらいのことは分かるの(ちよっと寂しそう)」
母「(そんな娘の表情に気づき、良江の目をしっかり見ると、首振り)良江が、一番いとしげら(新潟弁)」
娘「もお、お母さんに言われても・・・」
母「笑顔が最高」
娘「親バカ」
母「(笑って作業に戻るが、ふと手を止め)あー」
娘「？」
母「なになに、ひよつとして、好きな子、できた？」
娘「え、あ、違う違う！」
母「えい、誰？ 教えなさい」
娘「だから違うって」

母「いいから、白状しちゃいなさい！ あ、健太君？」
娘「（心から）あいつは絶対絶対違う！」

娘(N)「一九八四年、初夏」

洗面所で油で汚れた手を入念に洗っている母。

居間でなにやら雑誌のようなものを読んでいる娘。

母、手を拭きつつ出て来て、

母「ね、部活の大会いつ？ 選手、選ばれたんでしょ？ 応援行くから」

娘「いいよ」

母「いいわよ、いつ？」

娘「仕事忙しいでしょ」

母「だって、最後の大会なんでしょ？ 去年も行けなかったし」

娘「どうせいつつも来れないじゃん」

母「今年は絶対行くから」

娘「絶対とか言わないで、約束、すぐ破るくせに……」

母「……」

娘「いいよ、どうせ、すぐ負けるし。来ても恥かくだけだよ」

母「……そういえば、進路、どうするの？ 高校、行くんでしょ？

私立でもさ、良江がほんとうに行きたいなら、お母さん頑張って」

娘「私、就職するつもりだから」

母「え？」

娘「中学卒業したら、就職するつもり」

母「どうして、だって、この前の面談の時は進学するってあなた」

娘「先生の前で言えるわけないでしょ」

母「なにが？ どうして言えないの」

娘「……」

母「どうして」

娘「……」

娘「無理でしょ、ウチは……」

母「！」

娘「大体、私勉強嫌いなもの。いいでしょ、もう義務教育終わるんだから」

母「……あのね、あなた、そんな、余計な心配しなくていいの。お母さんはね、あなたの為なら、高校だって大学だって、そのく

らいのお金お母さんが頑張って」

娘「だからそれが嫌だって言ってるの！」

母「！」

娘「いっつもそう。私の為私の為って、私頼んだ覚えなんか無い！」

母「！」

娘「私は、いやなの、そういうのは。お母さんの、そういう、なんていうか、おしつけがましいところ、私は昔から大嫌いだったの！」

母「！……」

娘「もおいしいから、私のことはもおいしいから、ほっといて！」(出る)

母「良江……」

娘(N)「一九八七年、横浜病院付属准看護婦学校」

校門付近で待つ母。

やってくる娘。

母「おめでどう、二年間、よく頑張ったね」

娘「ありがとう」

母「いよいよ看護婦さんだね」

娘「准看護婦ね」

母「ほんとに、これで良かったの」

娘「？」

母「こんな遠回りして……あのまま、高校行ったら、正看にだって……」

娘「それはもう終わった話でしょ。いいの、これで。言ったでしょ、私は、これが一番いいって思ったの。准看になって、三年間働いて、そのあと、もう一度きちんと勉強して、正看の資格とる。それが一番いい方法だって、私は思ったの。それが遠回りだなんて私全然思っていない。私は、立派な、看護婦になってみせます。今まで、ありがとうございました(頭下げる)」

母「……」

娘「(頭上げ)さ、帰ろ。今晚はすき焼きなんでしょ？ お肉、奮発してよね(と先に歩き出す)」

母「……(気持ち入れ替え、笑顔で)それじゃ、松阪牛、いっちゃんいますか！」

娘「おー、いっちゃんおいっちゃんお！」

娘(N) 「一九九三年、恋」

電話。

鳴る（呼び出し音は母が擬音で）。
慌ててとる娘。

娘「（ちよつと小声で）もしもし——あ、わたし。うん——うん、大丈夫、お母さんもお寝たから——うん、ありがとう。正看になりました。うん——うん、まーくんのおかげ。ほんとだよ。ずっと励ましてくれたから——うん——うん——私も——会いたい。うん——」

娘の恋。

母(N) 「一九九四年、松永家」

娘「（疲れた感じで）ただいまあ」
母「あ、お帰り、遅かったね」
娘「患者さん、急変しちゃって」
母「あら、大丈夫だったの？」
娘「うん・・・」
母「ご飯、食べた？」
娘「サンドイッチつまんだ」
母「一応、とつといたんだけど、どうする？」
娘「明日帰ってきたら食べる」
母「今夜夜勤なんでしょ？ 何時？」
娘「十二時には、出るかな」
母「（時計見て）あと三時間しかないじゃない！」
娘「とりあえず、寝るね」
母「お風呂は？」
娘「あ、シャワーだけ、浴びよっかな」
母「ほんとに大丈夫？」
娘「うん・・・」
母「無理しないでよ」
娘「あ、ちよつと、電話するから、先寝てていいから」
母「・・・」

部屋で。
電話をかける娘。
彼氏のもとへ。
呼び出し音は母が擬音で。
しかし、相手は出ない。

娘「出てよ、まーくん・・・」

空しく響くコール音。
娘の涙。
――失恋。

娘(N)「一九九八年、結婚式前夜」

母「準備はオーケー？」

娘「多分」

母「今日はもう早く寝なさい」

娘「――(何か言いたげ)」

母「どうしたの？」

娘「お母さん、本当に大丈夫？」

母「なにが」

娘「私が、この家出ちゃっても」

母「なに言ってるんの、大丈夫に決まってるでしょ」

娘「でも」

母「愛知県なんてね、新幹線で、二時間くらいなんだから、すぐよ。
それより、隆さん、しっかり支えてあげなさい」

娘「・・・うん」

母「仕事は続けるんでしょ？」

娘「そのつもり」

母「隆さんは？」

娘「理解してくれてる」

母「いい人に、出会えて良かったじゃない」

娘「うん」

母「結局、お母さんと好みは一緒だったのね」

娘「？」

母「顔はまあまあで、背の高い人」

娘「あ」

母「まあ、お父さんの方が、ちょっとだけいい男だったけど」
娘「見栄はっちゃって」
母「幸せになるのよ」
娘「（頷き、改まって）お母さん、今まで、本当にありが」
母「（と、遮って）あ、ちょっと待って！（と立ち上がる）」
娘「？」

仏壇から、夫の遺影を持ってくる母。

母「お父さんにも、聞かせてあげて」
娘「・・・（苦笑し）お父さん、今まで、ありがとうございました」
母「（と、笑顔だった母、突然、遺影胸に、その目に、涙。とまらぬ、涙）」

娘、そんな母の肩を、そっと抱く。

娘「ありがとう、お母さん」

母の涙。

娘(N)「二〇〇二年、病院」

駆けつけた母。

母「良江！」
娘「お母さん！」
母「大丈夫？」
娘「（首振り）ダメだった・・・」
母「・・・」
娘「赤ちゃん、ダメだった・・・（号泣）」
母「・・・大丈夫、大丈夫よ、良江、大丈夫」

娘の頭をなでる母。
子供の頃のように。

母(N)「二〇〇五年」

電話口の母と娘。

娘「大丈夫なの？」
母「大丈夫大丈夫、なんとかなるって」
娘「でも、その歳じゃ、雇ってくれるとこなんてどこもないでしょ」
母「そうでもないでしょ」
娘「そうでもあるわよ。もういいんじゃない、年金暮らしで。なんか趣味とかないの。あ、あれは、社交ダンス、興味あるって言うってたじゃない」
母「思ったよりね、お金が、かかりそうなのよ・・・」
娘「いいじゃない、もう自分のためだけに使えばいいんだから」
母「それはそうなんだけどねえ・・・」
娘「身体は？ どっか悪いとこないの」
母「おかげさまで」
娘「ね、じゃ、今度こっち遊びに来ない？ 愛知万博、連れてってあげる」
母「愛・地球博？」
娘「仕事ないならちようどいいじゃない」
母「でも・・・迷惑でしょ」
娘「何言ってるんの、隆さんも気にしてるし」
母「ほんといい人見つけたわね、あなた」
娘「お母さんだって、そろそろいい人見つけたら？ そういう人いないの？」
母「いるわけないわよ！ 幾つだと思ってるの」
娘「誰か紹介しようか？」
母「冗談じゃない、もう切るわよ」
娘「あ、ちよつと、お母さん！」
母「じゃね」

娘、電話切られる。

娘「・・・」

娘「二〇一〇年」

母の異変。

母の独白「娘が一人いましてね。愛知県で看護婦・・・いまは看護師っていうんですか、してましてね、もうすぐ婦長になるらしいんですけど、私には過ぎた子なんです。あ、名前は良江って言います。良の字は私の亡くなった主人の名前からもらったんです。ほんとに子供のころからいい子でね、手がかからない子だったんです。私の自慢の子です。結婚は、しますよ。これがとつてもいい旦那さんでね。子供はね、残念ながら出来なかつたんですけど、ま、こればかりはね・・・。時にはね、寂しいって思うときもありますよ。心細いなって、だけど、一人っていうのは、やっぱり気楽なもんでね、ほら、お友達の話なんか聞いてると、嫁姑の、あーゆうのはやっぱり、なんだかいやだなあって・・・。なにが幸せかなんて、ほんと分かりませんよね・・・。そういうえば、私にも娘が一人いましてね、愛知県に。良江っていうんですけど、看護婦をしましてね、あ、今は看護師っていうんですけど？。それが、もうすぐ婦長になるらしいんですけどね、この子が、私には過ぎた子で、小さい頃から、ほんと手のかからない子でね・・・」

以下、娘の独白の途中から、母、突然不安な顔になり、自分の額を叩き始める。

まだらボケの状態。

自分が陥った状況に苦悩する母。

不安と戸惑い。

(二〇一三年)

娘の独白「(母の独白にかぶり)母は、新潟出身で、中学卒業してから、横浜に出てきて、とにかくいぶん苦労したんです。二十七歳で結婚して、二十九歳で私を妊娠したんですけど、私が生まれる三か月前に、夫、つまり、私のお父さんを心臓の病気で亡くしてしまつて、そのあと、一人で、私を育ててくれたんです。不自由をかけたまいと、自動車部品の工場で男の人と一緒に油まみれになって、物心ついた時から、母の手の指は、油でいつも真っ黒でした。本人は、だからいつつも洗面所で手を洗つて・・・。多分、気にしてたんでしょうね。私も、その手が、我が家の貧乏の象徴みたいに思えて、ちょっと嫌だなあつて思っていたのを覚えてます。でもね・・・母は、その手で、私に、惜しみない愛

情を与えてくれたんです。油まみれで真っ黒なその手で、ひたすら・・・なのに、私は、その愛情が時にうっとうしくて、反抗ばかりして・・・親孝行なんて、結局なんにもしてません。母の人生はようやくこれからなんです。これから、自分のために・・・それが、なんで・・・なんで母が・・・」

苦悩する母にどうすることもできない娘。

娘(N) 「二〇一四年」

ケアマネージャーに。

母「大丈夫です。お金は、そのために貯めてきましたから。いつか、こういうことがあってもいいように。この家も、少しはお金になるでしょうし。とにかく娘にだけは、迷惑かけたくないんです。あの子の負担になるのだけは・・・避けたいんです。どうか、どうかよろしくお願いします(頭下げる)」

娘(N) 「二〇一五年、施設にて」

やってくる娘。

娘「お母さん！」

母「あら、良江」

娘「なんでこんな勝手なことするの！」

母「なんで？ 案外いいとこでしょ？ ここ」

娘「隆さんも一緒に暮らしてくるって言うてるの。私も仕事辞めて、お母さんと一緒に」

母「ダメよ。あなたは、仕事やめちゃダメ。そんなことしたら、お母さん絶対許さないんだから」

娘「お母さん・・・」

母「その代わり、あなたに残すものはもう何もないからね。お母さん、もう、あなたを助けてあげられないからね」

娘「・・・」

母「あなただって、あなたの意志で自分の道を決めたでしょ。私だって・・・これが、私の決めた、私の道」

娘「・・・いいの？」

母「いいものにも、もう充分贅沢よ。私には、贅沢すぎるくらい」
娘「・・・」

母「だから、もお心配しないで」

娘「お母さん・・・」

母「ねえお父さんは？」

娘「え？」

母「お父さんは、どこ行っちゃったの？ さっきまでここにいたんだけどね、良史さん。あなた、見かけなかった？」

娘「・・・」

娘「こうして、母は、徐々に徐々に、母でなくなっていき、私の名前も分からなくなり、私が誰なのかも、分からなくなった。私と母の時間が、終わろうとしていた。永遠に続くと思っていた、その時間が・・・当たり前前だと思っていた、その時間が・・・」

病院。屋上。

白衣、マスク姿でやってくる娘。

忍び込む音楽。

母(N) 「二〇二二年、春」

空を見上げた娘。

母が亡くなって一年。

母は、もうこの世にいない。

それでも世界は存在し、空には雲が流れている。

変わらぬ(でもコロナ禍の)日常がある。

フと、最期に握ったあの日の母の手の温もりを思い出す。

娘「お母さん、今、どこにいるの？・・・」

音楽。

と、そこに、どこからか、ひとひらの桜の花びらが舞い落ちてくる。

その花びらは、ゆっくり娘の手のひらに、収まる。

まるで、はじめて抱いてもらった、あの日の母の手の温もりのような・・・。

時は再び戻り。

娘(N) 「二〇一九年」

母・娘 「(元気よく)母と娘」

施設。

娘 「こんにちは」

母 「こんにちは」

娘 「調子は、どうですか？」

母 「ありがとね」

娘 「私、判る？」

母 「・・・ごほん」

娘 「(微笑し)ごほんは、まだかな」

母 「お風呂」

娘 「お風呂も、まだかな」

母 「こんにちは」

娘 「こんにちは」

母 「ご用は、なんですか」

娘 「お顔を見に来ました」

母 「――」

娘 「お母さん、元気になって」

母 「ありがとね」

娘 「元気そうで、良かったです」

母 「(微笑み)はい」

娘 「あのお、お名前、教えてもらってもいいですか？」

母 「――」

娘 「お母さんの、お名前」

母 「――良江」

娘 「良江・・・お母さんの、お名前？」

母 「(頷く)」

娘 「・・・そうかあ・・・(微笑み)いい、お名前ですね」

母 「(微笑む)」

娘 「――じゃ・・・娘さんの、お名前は？」

母 「・・・正美」

娘 「正美さん？」

母「(頷き)はい」
娘「お母さんの名前が良江さんで、娘さんの名前が正美さん？」
母「はい」
娘「・・・そうか・・・そうだね、それも、いいかもね。うん、次は、それでいいこうね」
母「(微笑み、頷き)はい」
娘「良江さん」
母「？」
娘「手を、見せてもらってもいいですか？」
母「——(おずおずと、手を見せる)」
娘「(その手をじっと見て)ありがとね、お母さん。大好きだよ、お母さん」

と、

母「大好きだよ」
娘「え？」
母「大好きだよ」
娘「(じっと母の顔を見る)」
母「(もじっと娘の顔を見る)」
母・娘「(笑顔で)大好きだよ」

役者、本を閉じる。
立ち上がり、お辞儀をする。
退出する。

おわり